

5 福岡を中心に進展著しい九州の実践園

九州地方での“核”は何ととっても福岡県といえます。そして、20か園近くを擁する福岡県を先頭に、佐賀、長崎、熊本、大分、鹿児島と、各々数園の石井方式実践園があり、年を追うごとに、その数も増加傾向にあります。

保育園で実践に熱の入る福岡県

さて“先進県”の福岡では、全国の傾向とは少々違った特色があります。それは、保育園における石井方式の実践が盛んなことです。おそらく県内実践園の約半数が保育園と思われませんが、これは後に出て来る茨城県などを除けば、他県では、幼稚園が多くを占めていることにくらべて、きわだった特徴といえるでしょう。

なかでも熱心な福岡市内の屋形原保育園では、昭和54年の後半から石井方式を取り入れています。理事長の木原文人先生によりまして、導入の直接的なキッカケは、石井先生の著作を読んだためといい、さっそく、園児たちのゲタ箱に、ひらがなを使わず、漢字で名前を記入したところ、園児はひらがなよりずっと早く名前を覚え、はき物の間違いなどがグンと減ったとのこと。これらのことで意を強くし、本格的採用を決心したといえます。導入を推し進めた木原先生は当初のことを、次のように話しています。

「私が先頭に立って先生方を説得しました。そのころ、当園では、比較的、新しい若い先生方が大半で、漢字学習については、いわばシロウトだったわけですが、逆に“旧観念”が薄かったためもあって、

わりとすんなり取り組むようになりました。また、園児の親に、小学校から大学まで学校の先生が多く、教育熱心であったことも幸いしまして、漢字のことで苦情をいわれることは、ほぼなかったわけです」

二歳児から三歳児までは、主としてフラッシュカード(大きめの漢字カード)を使い、四、五歳になると漢字絵本を用いて指導していますが、なかに、二歳にして、宮沢賢治の詩を読みあげる子どもがいるそうです。卒園児の追跡調査はとくに試みていませんが、保育園では全く目立たなかった子が、小学校へ上がると、成績が極めて良い生徒となる例もあって、今では、地域からも十分認められ、行政機関の反対もないということです。

屋形原保育園はまた、市内の実践保育園のなかで最古参ということもあってか、近隣保育園への普及活動にも力を入れています。昭和57年の2月には、公開保育を行ない、多くの関係者が集まりました。これらが実ったのか、現在では、福岡市の実践保育園は十か園近くになったといえます。市内の保育園総数は民間が約130か所、公立が27、8か所で、公立で石井方式を採用する園はなく、すべての実践園は民間経営のところであるということです。

木原先生は、今後の抱負について、「地域的には福岡市内に限らずもう少し遠方にも働きかけを行ないたい。また、今までの実践活動をより定着させ、職員の質の向上、できれば専門家を育てる研修などに力を注いでいきたいですね」と語っていました。

同じく福岡市内の保育園で、昭和56年度から漢字学習を進めているのが成徳保育園。53年開園といえますから、園自体も新しく、現在およそ150人の園児が楽しく、フラッシュカードや漢字絵本に取り組

んでいます。

「単に子どもを預り保育するだけではどうか、と疑問を持ったのが、石井方式を採用する伏線になっていたと思います。最初は、それほどまでしなくても、と反対の声がありました。でもいまでは、父兄の方からは、喜んで期待する声が高まっています」

これは、園長の青柳ヨシ子先生の言葉です。ここでもまた、やってみたら、当初とは全く逆の反応が表われたというケースでしょう。園児たちは、さらに「漢字を覚えると同時に、それから先のものにも興味を持つようになった」といいますから、大人の心配(?)をヨソに、すこやかに伸び伸びと成長していく姿が見て取れるというものです。

一方、福岡における幼稚園はどうかといえますと、もちろん、保育園に追いつけとばかりに発展を見せています。

昭和48年導入と、“古手”の部類に入る福岡市内の城南幼稚園は、約四百名の園児が漢字と親しんでおりますし、58年採用の、全く新しい席田(むしろだ)幼稚園も、姉妹園の月隈幼稚園ともども熱心に実践活動を繰り広げています。

ちなみに、席田幼稚園の小桶井トミ子園長はこう語っています。

「石井方式そのものは、十年くらい前から知っておりましたが、いつか実践してみたいと思いつけていたのですが、つい最近、石井先生が公開授業のため福岡に来られ、それを見て、決心した次第です。

やはり、園児たちには、日常生活のなかで、“本物”の授業として、知能を開発向上させてやりたいものです。思考力を伸ばすという意味でも漢字学習は最適でしょうし。

最初は父兄から反対の声があがりました。“子どもに漢字を教える

なんてやりすぎだ”という理由が多かったと記憶しています。けれども、石井先生に今年(58年)5月、来園していただき、公開授業を行ないましたが、それを見た方は心から納得してくれたようです。

漢字絵本を使ったり、いろいろな場所に漢字で書いた貼り紙をしたり、良くできた子にはシールをノートに貼ってやったりと、工夫をしていますが、子どもたちは恥ずかしがらずに声を出して絵本を読むし、文中の接続詞や句読点にも気を配るようになりました」

福岡市内には幼稚園が約180ありますが、石井方式導入に踏み切れずにためらっている園もいくつかあるそうです。そのなかで、昭和48年開園以来十年余、漢字学習の採用を考えつつ、ついに決心し、導入に踏み切った席田幼稚園の小桶井先生のこうした感想は、現在、採用に迷いを感じている幼稚園の先生方へ、大きな刺激となるのではないのでしょうか。

大分はやまばと幼稚園、長崎では滑石中央幼稚園が中心

大分県大分市のやまばと幼稚園は、同県内で最も早くから漢字教育に力を注いできました。早くから、といっても54年度からですが、その後の進捗状況には著しいものがあり、園内外の評価も高く、すでに数園がやまばと幼稚園に習って実践園として産ぶ声をあげるに至っています。

とくに、園長の矢野一也先生の情熱はずばぬけ、自ら“石井方式に心酔”というほど、熱心な推進者として知られています。そこで、「母と子の新聞」に寄せた、矢野先生の熱のこもった一文を紹介することにしましょう。

「本園では毎年11月1日に新入園児募集をします。入園は受け付け順です。募集についての宣伝広告は一切しません。

例年、夜明けから受け付け時刻2時間ぐらい前に来ないと、入園順位がとれません。今年も百名補充募集をしたところ、前夜半の11時から朝5時まで並んだ人しか入園順位がとれませんでした。あきらめて帰った人々を除いて、ぜひ何とかしてと言う人々を数十名もお断わりし、気の毒なことをしました。

大分市では公立私立とも定員不足現象が昨年より目立ち始めているのに、本園では逆現象なのです。その理由のひとつは、3年前より始めた石井式漢字教育のすばらしい成果が認識されたことにあります。これは断言できます。たとえば、11月に実施した漢字教育公開研究会には、県内より二百名のお母さん方が来園されたのには驚きました。

私は学校長を停年退職後、幼稚園長となり、多年心酔してきたものの、公立校では実行できなかった石井先生の漢字教育をとりあげて、先生の指導の下に全職員で踏み切ったことに大きな満足を感じております。

漢字教育は単なる知識教育ではないことは当然ですが、この教育に付随して多方面にわたる顕著な効果が認められます。大脳刺激による知的訓練は子どもの理解力を高め、集中力を深め、読書意欲を強化し正しい行動力を養成します。

本園では4月から12月までは裸の生活で毎日の乾布摩擦とお山の駆け足で、他にみられないスパルタ教育を継続して体力増進に努めていますが、漢字教育の併用によって、躰の面も力強く向上してお

ります。

57年度中には恐らく県内にも志を同じくする園が実現するであろうと思いますが、私は姉妹園として、手を組んで協力したいと念願しております。定員二百名、六千平方メートルの敷地があり、自然の山をとり入れた閑静な環境の、中規模園ですが、来園の方は緑の多い環境に感歎されます。今後とも石井先生始め、先輩園の御指導をお願い致します」(57年3月15日号)

こうした情熱を注いだ実践指導の結果、矢野先生は「子どもたちは、一様に読書好きとなり、集中力、理解力が向上し、およそ“非行”というものはみられません。さらに、本園の卒業生の七割は、小学校で優秀児ランクを占めていますね」といい切るほど、すばらしい成果をあげていると強調しています。

長崎県では、長崎市滑石の滑石中央幼稚園が、昭和56年9月から石井方式を取り入れています。採用の理由は、園長の金子達洋先生のかねてから考えていたことが、石井先生の考えと相通じるものがあつたためということです。けれども、当初には、父兄からの反発がかなりあり、石井先生に来園してもらっての講演、公開保育その他、再三の説得によって多数の支持を集めることができたそうです。もちろんいまでは、各方面から高い評価を受けているのはいうまでもありません。とくに卒園児の父兄からは「小学校に子どもが入っても、漢字が大好きで、本当に漢字教育をやっていただいてよかった」との声をしばしばもらうといえます。

漢字絵本、漢字諺カルタ、フラッシュカードなどを使い、黒板その他に書く文字はすべて漢字。広広とした幼稚園の玄関ホールにある

園児読書コーナーでは、漢字絵本が最も子どもの人気を集めているとのことで、滑石ニュータウン内の、豊かな自然に囲まれた環境のなかで、340名の子どもたちは、毎日を楽しく過ごしているというわけです。

福岡に次ぐ“先進県”鹿児島

鹿児島は九州では福岡に次いで実践園の多いところ。ここはまた、福岡に似て、保育園での漢字教育もさかんです。たとえば曽於郡には二つの保育園で漢字学習が行なわれています。

その一つ、太陽の子保育園は、昭和53年から石井方式の実践を始めています。その年の4月に、大阪・小路幼稚園の漢字学習を見学したのが、直接のキッカケといます。そのせいか、教材には漢字絵本、フラッシュカードの他、小路幼稚園と同様、最近では論語や唐詩なども取り上げているそうです。最初のころあった父兄や教師の側の反発も漢字よりかなが先、何も園児にそこまでしなくてもなくなり、絵本や普通の本に興味を示し、時に、親の知らない漢字を読みあげたりする子どもの姿に、今では諧でもが理解を示してくれています。「**子どもの顔付きがしまってくる**」といった父兄の感想もあるほどです。

曽於郡のもう一つの実践保育園は通山保育園です。石井方式採用は昭和57年と新しいのですが、幼児の父兄が抱いていた“半信半疑”も早やなくなって、成長するわが子の姿を見るにつけ、ますます理解を深めて来ており、一方、先生方も、子どもの示す能力の高さに驚き「やればできるのだ」ということを改めて確認できたと、園長の横

峯吉文先生は述べています。

指導方法は、漢字カードを毎日の日課の中に組み入れ、一週間で12～14枚程度のペースで進め、漢字はあくまでも子どもの身近にあるものからピックアップする、というもの。また、漢字絵本なども、紙芝居などにして子どもたちの興味を高める工夫をしているそうです。子どもたちは漢字を見ると、たとえば、「チャンの(名前の)の字だ」というように、自ら発見する力を身につけていくようで、全体として、判断力、理解力が向上したということです。

入園希望者も、石井方式導入前と後とでは、後の方がぐんと増えてきているそうです。これも、幼児期がいかに大切な時期であるかが、父兄に理解されてきたことの現われといえるかも知れません。

近郊の保育園への働きかけもいろいろと行なっており、このところ、漢字学習の方法などを研究し始めたり、意見を求めてくる園が出てきているとのことです。幼児期の漢字学習の重要性について、父兄だけに限らず、保育関係者にも身にしみて感じてきていることの証しではないでしょうか。

肝属郡では国見保育園が活躍中。昨年(昭和57年)、石井先生の公開授業を見学し、即採用を決め、さっそく今年からやり始めたといえますから、まだホヤホヤで、「石井方式については今後もっと勉強しないとイケませんから、先生方も研修に励んでいます。いずれにしても、子どもたちは喜んでやっていますので、やはり大人の判断では決めつけられないことが多いですね」とは、実践開始後数か月の、平野兼弘園長が語った感想です。